

---

# 鬼島 政成の中学生日記

元・配達人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼島 政成の中学生日記

### 【Nコード】

N5334R

### 【作者名】

元・配達人

### 【あらすじ】

この話は書いてる人のオリキャラ、鬼島 政成の中学時代の話です。

色々な世界で勝手気ままにやりたいほうだいな彼の中学時代。

興味が出て下さった方はチラッと覗いて下さると嬉しいです。

鬼島 政成については、書いてる人の、『来る世界<sup>とこ</sup>間違えてね？』  
などの話を見て下されば・・・いえ、なんでもないです。

かなり不定期です。

一ページ目(前書き)

前書き

短い!!

ただ、それだけ。

## 一 ページ目

いつからだっただろう・・・。

「うわっ・・・アイツ、鬼島!？」

「マジ!? 同じクラスとか、カンベンして欲しいぜ」

「バカ!! 聞かれたらどうすんだっ!？」

他人<sup>ひと</sup>から、そういう風に見られるようになったのは・・・。

いつからだっただろう。

「テメエが鬼島かあ？」

「最近よく聞くぜ、ハデに名前が売れてるってなあ？」

「<sup>ガキ</sup>中学生のクセに高校生（俺ら）に喧嘩を売るとかナメてる<sup>てき</sup>とか  
言えねえよなあ？」

歩いてるだけで他人<sup>てき</sup>が寄ってくるようになったのは・・・。

いつからだっただろう……。

「鬼島、コレで何回目だ……なんだ、その目は？ フン、もういい帰っていい」

「また鬼島ですか……」

「ええ、全く迷惑な生徒です……いつそのこと、この前の騒ぎで鑑別所にも入ってれば良かったんですよ」

「先生、言い過ぎですよ、まあ気持ちはわかりますがなあ」

他人おとなに、そう言われ始めたのは……。

いつからだっただろう……。

「えっ？ アンタ中坊！？ 若さが憎い・・・」

「何？ アンタ停学くらったの？ ならヒマでしょ、ちょっと手伝ってよ」

「アンタね、その仏頂面、なんとかしなって」

他人が居るコトが楽しく思い始めたのは・・・。

いつからだろう・・・。

「おっ！？ なんだ、アンタちゃんと笑えるじゃん、うんうん、そっちのが、ずっといいよ」

「グスツ・・・今時のアニメ侮れね、ちよっとティッシュ、ってアンタも泣いてんのかいっ！！」

「おっ美味え、アンタ料理美味いんだ？ よし、アンタはコシから私の専属料理人ってコトで！！ ってなんだ、そのアホを子を見る目は！！ 何？ だから結婚出来ない！？ 射殺するよ！！」

その友が居ると何時も以上に笑ったり泣いたり怒ったり出来るよ  
うになったのは……。

・  
・  
・  
・

『ミン、ミン、ミン、ミン』

「元気だね」

今日も今日とて元気に鳴く蝉の声を聞きながら、アスファルトを  
歩く。

「ンツ……やっぱり美味えな」

片手にアイツから進められて飲み始めたミルミ。

その反対側の手には、花束……まあ束って程じゃねえけど。

「寧ろ酒持ってこいとか言われそうだな……」

というか言うだろうな……ったく。



そのまま目的地まで行ってもよかつたんだが、後でブー垂れられんなあめんどくせえしな。

「しゃーねえ、買つてくか」

独りごちり酒屋へと足を向けて歩く。

『コトコト』

何時ものクセでビール六本が一塊になっている賞品を置いてから。

「しまった・・・悪い、おっちゃん、一本で良かったわ」

そんなに数は要らなかつたコトに気付き、酒屋のおっちゃんに謝りながら、ビールを戻そうとした所で、おっちゃんに呼び止められ。

「いいよ、いいよ、そのまま持つてきな、きつと一本じゃ足りねえーって言うぜ、値段は一本分でいいからよ、後は俺からだって言つといてくれや」

おっちゃん、俺がコレから行くところとしてるトコが分かつてるようで、苦笑しながらも、そう言ってくれた。

まあそうじゃなきゃ中坊に酒は売らんわなあ。

つつても、殆ど常連みたいなモンだけどジジイにも買いに行かされたトキがあったしな。

少しだけ、そう考えつつ、おっちゃん言葉に俺も。

「だな、あの飲ん兵衛は、わあった、伝えとくわ」

笑いながら、そう答えた。

酒屋を出て、再び目的地へと向かって歩き始める。

目の前をコノ辺りの近所に住んでるだろうチビ達が走り抜けていった。

今は夏休み真っ只中。

肩からは水着が入ってんだらうバックが見えた。

「今からプールにでも行くのかね」

もしくは海か？

どっちにしる気持ち良さそうだ。

「俺も明日辺り行くか？」

誰か誘って？ 今なら一人くれえは乗ってくれる・・・と思いたい。

核心が持てねえのがちと悲しい。

まあそれでも以前に比べりゃ大分マシではあるんだが。

ぼんやり考えながらも足は目的地へと近付いて行く。

目を懲らせば、既にその目的地は見えはじめていた。

『ミーン、ミン、ミン、ミーン』

蝉の鳴き声。

「ホントに元気なこって・・・」

元気に鳴く蝉。

その元気さの裏には一週間という短い、本当に短すぎる程に短い時間を精一杯に生きてる、そんな強さと輝きがある。

「よお、久々・・・って程でもねえか？」

目的地に到着し、軽く花束を上げながらアイサツをする。

花束はヒマワリ、何となくコイツのイメージに合ってる気がしたから、育ててみた花だ。

コイツとの付き合いも短かった、一週間という短かさじゃないが、俺にとっては短すぎる程に短く・・・そして、その短かさは裏腹に強く輝いていた。

「ほれ、一本は俺から、残りは酒屋の、おっちゃんからだ」

『さっすが、気がきくじゃん!! おっちゃんにもサンキューって言っというて』

「おっ!..!」

弾むような声。

声は聞こえなくても・・・。

嬉しそうに笑う顔、だが、視線は持つてるビールに集中している。

姿は見えなくても・・・。

「飲み過ぎには注意しろよパー子？」

「ハツハツハ、バカナリ君、死人に何を言うのやら」

プツ、そりゃそうか？

思わず吹き出してしまふ。

聞こえはしない声が面白く、見えはしない笑い顔が嬉しくて。

『香田家之墓』

そう書いてある場所の前で、俺はひとしきり笑っていた。



## 一 ページ目（後書き）

後書き

一瞬、誰コイツと書いてる人も思った。

でも一応はマサです。

## 二ページ目(前書き)

前書き

なんかありきたり・・・。

ただそれだけ。



## 二ページ目

「くたばれクソジジイー！！」

俺が中学に入学し二、三日が経ったある日、ジジイが珍しくメシを作ってくれた。

普段から家事を全くしねえーで俺に押し付けやがるクセにジジイの料理の腕は半端じゃない。

かなり美味しいジジイのメシ、しかもホントに時々しか作らないので俺は結構、嬉しくてガツガツとそのメシを口へと入れていった。

俺としては珍しく、素直にジジイに礼を言おうとしたんだが・・・。

その瞬間に強烈な眠気に襲われた。

食った瞬間に眠くなるなんざあ、俺どごそのラバーメンかよ？

と一瞬思ったが、ジジイのニヤリとした口元を見て核心した。

嵌められた・・・と。

次に俺が目覚めた時に目に入った光景は明らかに日本じゃなかった。

森・・・というよりジャングルと言った方がいいような場所。

日本ではまず見ないだろうトリヤ、虫・・・。

何処だココ？ と思った俺のすぐ側に一枚の紙切れ、所謂、手紙ってヤツだった。

その手紙の内容を見た瞬間、俺は吠えたと思う。

思うと言ったのは、余りにドタマに血が上り過ぎて、その時の口をハッキリとは思いつけなかつたからだ。

手紙には・・・。

『いや、随分前にジャングルに取り残された若者が何とか帰ってくるって映画を見ての？』

フとソレを思い出したのでマサでどうなるか試してみたくなかったのじゃ。

頑張つて帰ってくるんじゃないぞ？

爺ちゃんより』

そう書いてあった・・・最後の爺ちゃんよりが異様に腹が立った。

その手紙はどうしたかって？

破り捨てないワケがないだろ。

まあ手紙を破り捨てたくれえで俺の怒りは収まらなかったんだが、  
つつかコレで収まるヤツはないと思う。

その後まずしたコトは現状の確認、つつか再認識。

場所、ジャングル。

装備、ガクラン。

武器、拳。

アイテム、破れた手紙。

クリアー条件、家に帰宅、及びジジイの撃破。

ふむ・・・最後の厳しい気がする。

って言ってる場合じゃねーっつうの。

マジありえん・・・俺あどごその裸のへびじゃねえんだぞ？

そりゃかなり普通のヤツとは外れてるけど、っーか人外バンザイな程にぶっ飛んでると言わざるえねえけど。

っつと、ぶちぶちグチを言っても始まらねえー、とにかく動くコトから始めるか。

そう決めて動き始めて直ぐに。

『シャーーーーー!!--!』

俺の胴回りくらいは、あると思われる巨大へびに遭遇した、所謂アナコンダだ。

さっき裸のへびを考えてたコトが原因か？ 若干アホなコトを考えてる間にも俺のコトをエサと認識したアナコンダがスルツと俺の足に体に巻き付いてくる。

ギシギシと締め付け始めるアナコンダ、普通のヤツなら足の骨が

砕けているが、あいにくと俺は普通じゃねえ。

まだまだギブするには余裕がある。

が、このままじゃれつかれてても鬱陶しいし、腹も減ってきてたんで、俺のメシになってもらうとするか？

そう決めると同時にアナコンダ頭をガシリと掴み。

「まっ弱肉強食ってコトで悪いな？」

『グシヤリ!!』

アイアンクローの要領でアナコンダの頭を握り潰した。

・  
・  
・  
・

「中々美味かったな」

アナコンダはトリ肉っぽい味だった。

ちなみに生じゃなくてキツチリと焼いてから食ったからな？

火は原始のアレでサクツとおこせたし。

腹も満たされたんで再びジャングルをさまよう。

すると感じる人の気配、一瞬ツイてると思ったが、こんなジャングルになして人がいるとや？ と思い直したが。

もしかしたらテレビの企画の。

『巨大アナコンダを追え!!』

とかで来た藤○隊長かもしれんと思ひ直し・・・つか、思ひ直してばかりじゃね？

いや、まあいいさね。

とりあえずポジティブシンキングで、そう思ひ直して近付いてみる「ト」。

「\$£@¥\*@\$¥!~!」

「\$¥\$ひ\*φss~!」

藤 隊長じゃなかった・・・。

完全に日本語じゃない言葉で喚き立てるそいつらに銃を突き付けられてる。

武装ゲリラの類ですね、わかります。

いや、言ってる場合かっつうの。

「\*£¥　　! !」

『ドッ! !!』

銃口で肩を突かれた、イラっとした思わず。

「うるせえ! !」

『ゴキヤ! !!』

手が出た、裏拳だった、それをまともに受けた武装ゲリラAズルズルと崩れ落ちる。

しばしの静寂・・・そして。

「¥\$@\$\$　\$¥! !」

「」「」「」  
「\*£\$! !!」

予想通りに襲い掛かってくる武装ゲリラ達。

しょーがねえ、やるしかねえよな？

『ゴキゴキン！！』

クビを回しながら指を鳴らし。

「来いよオラアアア！！」

武装ゲリラ達を向かえうった。

・  
・  
・  
・

「オラ、起きろ」

『ガッ』

転がってる武装ゲリラの一人のアゴに軽い蹴りを入れて起こす。

「  
φ£\*¥φ\*!？」

何やらかなりビビリが入ってるようだ、まあそりゃそうだな。

銃を撃つても避けられるわ、ナイフを振り回しても当たらないわ、あげく素手で全員、一撃で転がされてんだからよ。

しかも、ガキ一人に。



まっ、コイツの都合はどうでもいいわな。

「オマエ、このジャングルの出口に案内しろ、わかるか？ 出口だぞ？ 出口？ ちなみに拒否権はねえ」

『ブンブン』

俺が何を言いたいとか察したのか勢いよくクビを縦に振るゲリラ

B。

よしよし、素直じゃねえか。

肩を掴んでの説得が良かったんだな。

若干最後の辺りで肩からミシミシつつ音がでてたけど。

「で、オマエさん名前は？ っと俺は鬼島 政成だ、マサナリだぞマサナリ」

名前を聞き出すと同時に自分を指差して名前を言う。

「マ・・・マサナリ？」

「おう、マサナリだマサナリ、でオマエは？」

「ラウ」

ラウと言っらしい。

よくみりゃこのラウと言っヤツ結構、若い10代後半から20代前半ってトコか？

「まっ少しの間だろっけどヨロシク頼むわラウ」

「コケコケ」

素直に頷くラウ、随分と素直だな・・・っか、やっぱ、まだビビり入ってんのか？

「あゝゝゝ、別に突っ掛かってこなけりあ何もしねえーっつの」

「¥£\*？」

「ああ、ホントだ、まあ突っ掛かってくんなら別だけだよ？」

「ビクッ！！」

っといけねえ、ついリアクションが面白くて、からかっちまった。

っつが、意外と通じるモンだな？

前にテレビで、兄弟芸人の兄が外国人相手に日本語で会話してるっつのを聞いた時はマユツバかと思っただけだよ。

「冗談だ冗談」

いまだにビクついてるラウの肩をポンと叩いてそう言って置いた。

それからラウに道案内、いや、この場合はジャングル案内か？

って、どっちやでもいいわな。

案内してもらいながら、色々と話をした、俺は日本語、ラウは・  
何語かはわからんけど、とにかく話をしたワケだ。

どうやらラウは17らしい、で妹さんと二人暮らしなんだと。

名前はルル、俺よか二つ下の10歳らしい。

俺がまだ12だと知った時のラウのマジでか！？ 顔は若干イラ  
ツとしたが、確かにわからんでもないとも思った。

同い年のヤツらに比べりゃ、ガタイは悪くはない方だしな？

飛び抜けてって程じゃねえけど。

ちなみに俺の身長は164な？

顔は・・・目つきの悪さには自信がある、ってなんだその自信は？

まあいいさね。

とにかくラウにはルルつう妹が居るんだと、で妹は結構頭がいいらしく、良い学校に入りたいから、武装ゲリラ・・・殆ど盗賊状態らしい、に入って金を稼いでるらしい。

話をしてみても向いてないんじゃないか？ と思ったが、そういう事情だったとはなあ。

「手段はともかくとしていいアニキじゃねえか」

「へへッ・・・」

俺の言葉に照れ笑い、人の良さそうな笑い方。

なんつうか、やっぱり向いてねえだろコイツ？

かと言って・・・。

「んな危ねえコトはとっとと抜ける」

と言った所で。

「ブンブン」

クビを横に振られる、金は必要だからなあ、わからんでもねえが・・・。

「真つ当な職につけや、オマエ、マジで死んじまうぞ?」

「ウウ~~~~~£\*¥#&!~!」

本人もわかってるちゃ、わかってるらしいが、頭もよくなけや要領も悪い、真つ当な職にありつけても、学費には到底足りない。

学費を稼ぐまでは続ける・・・か。

チツ・・・コレばかりは・・・ン?

ちいと良いコト思いついた。

「ラウ、オマエ、今入ってる組織? でいいのか? 今入ってる組織に愛着あるか?」

「ブンブン」

クビを横に、ないらしい、まあ金の為つってたしな。

やってるコトは近場の村とか襲って金品を巻き上げてるってクソつたれなコトだし。

更には女子供を拉致っては売っぱらう、なんてコトまでしてやがるらしいからな。

ラウは参加してねえらしいけど。

もし参加してたら・・・いやしねえか？ そんな気がするわ、カ  
ンだけどな。

「なあラウ、予定変更だ、今は出口はいいわ、オマエらのマジトに  
案内してくんね？」

「?????」

ニヤリ笑いをする俺にハテナを顔中に貼付けたラウはクビを傾げ  
る。

さあ〜とど。

軽〜けガイド代を稼ぐとすつかねえ〜。

後ついでに俺の旅費、円は流石に通じねえだろうしな。

・  
・  
・  
・

「アレがアジトか？」

物影に身を潜めながら顔だけを出しラウに確認。

「コクコク」

ラウも同様に顔だけ出して、俺の質問にクビを縦に振る。

木で組み上げられた建物、大分、簡単というか、俺ならもつといのを建てられるってぐらいに温い建物。

真ん中の建物だけは、他と違ってシツカリとした造り。

多分ボスはその建物だろうな。

さて頭から取るか、周りから潰すか……。

思索しているとアジトの所に一台のトラックが止まった。

そのトラックからは、ロープで繋がれた女、子供……。

よし決定。

「ラウ、少しココで待ってる」

「コクコク」

「ラウにそう伝え俺は見張りの目を盗みサッとそのトラックの側へ。」

「女子供の後ろにいたゲリラ・・・じゃねえな寧ろ盗賊にそーっと近づき。」

『バツ！！』

「モガッ!?!」

口を抑えながら、同時にクビを絞めて意識を奪う。

最後尾にいた女の子が俺に気付くが。

「シーー!?!」

口に指を当ててシーのポーズ。

女の子は素直にコクコクと頷いてくれた。

それを確認した後、寝かしつけた盗賊の服・・・というよりマントみたいなコートと顔を隠す為に使った布を剥ぎ取って身に纏う。

寝かしつけた盗賊は、トラックに隠しといた。

さて・・・。



変装もしたんでラウを呼ぶ。

ラウはコソコソした動きで俺の側に……つつか。

「オマエはコソコソする必要ねえーだろ？」

「アッ……」

俺に言われて気付くってどうよ？　と思いつつも。

「ラウ、オマエ、あの前にいる、もう一人のヤツと交代してこい、引き継ぎとか、なんとか言っつて」

「コクコク」

俺の指示に従いラウは先頭にいる盗賊の一人に話かける、盗賊の一人はラウの言葉を信じたのか素直に場を離れていった。

上手くコトが運んだのが嬉しかったのかニコニコしながら俺に手を振るラウ……そんなラウにツカツカと近寄って。

『ガスッ！！』

頭に一撃、所謂ゲンコツ。

「ウウ~~~~」

恨めしいそうに俺を見るが。

「オマエはアホかっ!? 気付かれたらどうすんだっつもの!?!」

小声で怒鳴ると言うかなり特殊なコトをした。

途端にペコペコ謝るラウ。

それはそれで怪しいっつもの……ってヤベっ!?!?

めっさ見張りが見てるし!?!

「#&¥\*@£?」

何か問題でもおきたかと言ってくる見張りにラウと揃って。

「コブンブン」

クビを横に振る。

まだ若干怪しんでいたが、一応信じてくれたのか、見張りは俺達から目線を外してくれた。

「コホツ……」

それと同時に揃って息を吐く。

なんつーか、俺らの状態ってまんまコントじゃねえか？

そんなどうでもいいコトを考えながらも拉致られた人達を閉じ込めておく小屋へと入った。

『バツ』

ココで顔に巻いてあった布を取り、拉致られた人達のロープも解いてやる。

「さてさて、今から、ちいとばつかし外が騒がしくなっけど、大人しくしてろよ？ ラウもココで待ってる」

「ココココ」

頷くラウとさつき軽く俺に気付いた女の子。

他の人達は、若干状況が掴めてないようだが、その辺りはラウに任せよう。

「じゃ行つてくらあ〜」

入って来たドアではなく、上にあった天窓みたいな穴から出て屋根を走りヤグラの上にいる見張りに接近。

なんか俺って忍者っぽい？

寧ろNINJA？ あっコッチのがシックリくる。

アホなコトを考えてたのがマズかったのか見張りは俺に気付くと

慌てた様子で機銃を向ける。

慌てず騒がずガ克蘭の第一ボタンを引きちぎり指弾の要領で見張りの指に放つ。

『ミシッ』

ボタンが見張りの指を曲がらない方向へと曲げた。

同時に見張りがその痛みで叫び声を上げそうになっていたが、その前にヤグラに飛び込み口を抑えて鳩尾にヒザ、見事におねんね。

これくらいの高さなら死にはしない・・・はず、運が良ければ。

悪かったら・・・諦めろ。

そう思いながら見張りをヤグラの外へとぶん投げる。

ドサリと落ちた見張りに一斉に反応する盗賊一味。

視線がそつちに集中してる間に再び屋根を伝いNINJAごっこ。

ヤベツ・・・なんか楽しくなってきた？

っといけねっ、気付かれた!!

俺に気付いた盗賊が発砲。

腕が悪いのか銃が悪いのか、多分両方だろうけど、全然明後日の方向に銃弾は飛んでいった。

まあ当たっても死にはしないけど。

でも痛いモンは痛い。

「@\*¥&!」

「げっ!? マズっ!!」

いくら撃つても当たらないコトにイラついたのか、奴らロケットランチャーを持ち出しやがった!!

流石にロケットランチャーの直撃は俺でも死ぬ・・・かも?

頑張れば耐えられるやもしれんが、流石に試すワケにもイカン。

『ドンッ!』

「って撃ちやがった!! つそが、人が考え事してるつつうのに!」

迫るロケットランチャー・・・って意外に遅いな?

銃弾よか全然遅いわ・・・。

コレなら余裕で。

「ひよいつとな」

避けられる。

『ヒューン・・・チュドーン!!』

横を擦り抜けいったロケットは俺の後ろの建物に当たり建物は粉砕。

中に何人がいたかもしれんが、運が悪かったと諦める。

ととさつきロケランをぶっ放しくさりやがったヤツが次弾を装填しようとしてんな。

避けるのは意外に簡単だったがパカス力撃たれんのはカンベン願いてえ。

『ダダダダ、ダンツ!!』

助走して勢いをつけ、ソイツに向かい。

「ッラよ!!!!」

『ゴキヤー!!』

跳び蹴り、綺麗にクビ筋に入った、つか、かなり香ばしい音がしたな・・・折れたかもな？

まあ知ったこつちやねえけど・・・。

「なッ!!」

『グシヤッ!!』

ロケラン係の隣のヤツの顔面に拳を叩き込み、後ろから近付いて来たナイフ持ちには。

『ヒュッ、ガゴッ!!』

前宙の要領で縦回転しながらアゴに踵。

そこから先は乱戦に、寧ろ乱戦のが楽だった。

撃たれた弾を避けてるだけで勝手に自滅してってくれたしな。

たまにナイフとかそれよか、かなりデカイ刃物、ククリ刀つったっけ？ を振り回すヤツがいたけど。

丁寧に拳と蹴り、及び頭（頭突き）で対応しておいた。

盗賊共の数が10を切った所で漸く、あっ、コレはムリと思ったのか逃げをうちはじめる。

追っかけてもよかったんだが、面倒だったんで見逃す。

だが・・・。

「テメエはダメだ」

「¥\*£@§!?!」

大事そつに金やら宝石やらが入ってる袋を抱えて逃げようとしてるブタ。

多分ボス、目を付けてたボス屋敷から出て来たし。

なんか必死に命乞いっぽいコトをしてるが・・・。

「悪い、何語喋ってんのか全然わかんねえや?」

別に悪いとは思ってねえし特に恨みもねえけどベッコベッコにして逆さに吊しといた。

さて・・・後は、ブタボスが持ってた袋、及びボス屋敷にあった金目のモンを全て回収しトラックに詰め込む。



この時、最初に隠してた盗賊は外にポイ捨て。

そしてラウ達が居る小屋へと行き。

「ハイ、帰りのバスの時間だぜ〜」

そう声を掛けて帰りのバスこと、トラックへと乗せた。

小屋から出て外の様子を見た時は流石に驚いてたみたいけどな。

拉致った人達を送り届けると村の人達にエライ感謝された、照れ臭かった。

ラウもそうだったのか、早めに退散するコトに、ボスブタから回収した金品の幾らかを置いて、さっさと退散。

そしてラウが住んでる村へと到着。

「ほれ、ラウ、ガイド代、こんだけ、ありゃ学費に足りるだろ？」

「ん@¥\*ん」

寧ろお釣りがくるらしい、多過ぎるから俺に持ってけとうるさかったが俺は帰るまでの旅費がありゃよかったんで、それだけ貰って後はラウに押し付けた。

「@#\*¥ \*! !」

それでも結構しつこく言って来たが、女の子の声が聞こえてくる  
とラウはソチラに気を取られた。

どつやら、アレがラウの妹らしい。

「可愛いじゃんかよ」

「ニツ! !」

だろっ? と笑うラウ、そのラウの足にしがみつくとラウの妹・・・  
確かルルだったか?

つか・・・完全に俺ビビられてるし・・・。

ちょっと悲しい・・・。

まあいいけどな・・・ガラが悪いのは事実だし。

このままココに居てもビビられるだけだし、大きめの港の場所を  
教えてもらって出発するとするか。

「ラウ、俺あ、もう行くからよ、どっか港の場所を教えてください、出  
来ればデカめの」

「¥#@ひ¥!~!」

「一晩泊まっていけて……いや、そう言われても……。  
チラッとルルに目をやる。

『ササッ』

隠れた……。。

「なっ？ オマエん妹、多分、泣くぞ？」

「£@#£#¥\$!~!」

「#£@\$?」

「¥£@\$#!~!」

何やら兄妹会議してるし？

ン？ なんかルルがトコトコ近付いて来たな。

「ルル」

いや、知ってるけど……。

「ジーーーー」

スゲー見てるな・・・って、そっか、俺ン名前か。

「鬼島 政成、マサナリな？」

「????？」

覚えきれなかったらしい、もしくは聞き取れなかったか・・・ふむ。

「ああ~~~~マサだ、マサ」

「マサ？」

「おう、マサだ」

「マサ!?!」

微妙にサの部分のイントネーションが上がり気味だけど伝わったようだ。

「マサ、マサ!?!」

名前を連呼されながらルルに手を引かれる、さっきまでビビってたのにエライ変わりようだな？

とか思ったが、その様子になんか和んだ。

結局、ルルに手を引かれるままにラウの家に一泊世話になった。

その時にルルが俺の年を知った時のリアクションもラウと同じだった。

やはり兄妹だな・・・チクシヨウ。

・  
・  
・  
・

翌日、ルルがまだ寝ているうちにラウに港の場所を教えてもらい出発するコトに。

昨日の間に大分懐かれちゃったから、起きてる間に出発するのが、ちと・・・まあなんつうか・・・アレだったしな。

ラウも残念そうにしてくれてたけど。

「サンキューな色々と・・・じゃルルと仲良くな？」

あえて軽い感じでラウに別れを告げて出発した。

その後は・・・まあなんとか日本まで辿りつき（非合法的な手段の為に詳しくは割愛）

家へと帰りつく。

そして、さっそく、クソジジイを見つけると同時に。

「くたばれクソジジイー！！」

ジジイへと殴り掛かった・・・。

『メキッ！！』

カウンターで5番6番。

『ゴキヤッ！！』

追撃で右腕。

『ゴッ！！』

更にはアゴを持ってかれ。

『ゴシヤッ！！』

最後は後頭部を地面にたたき付けられた・・・。

死ぬかと思った・・・。

クソジジイ・・・いつか絶対ぶっ飛ばす！！

『パタリ』



## 二ページ目（後書き）

後書き

「アイツは今だに出ず!!」

そしてジャングル編の詳細でした。

後付けっばいとか、そう言うのはスルーでお願いします!!

あつ、後、感想などありましたら是非!!



### 三ページ目(前書き)

前書き

少し短いそして今までにまして厨まっしぐら……。

ただそれだけ。

### 三ページ目

今日も今日とて学校へ、なんせ俺はまだまだ中学生。

義務教育も終わってねえ。

だから今日も学校へ行く。

と普通のヤツなら、そうなるんだろうが生憎、俺は普通と言つてはクビを傾げざるえない。

前回で気付いてるとは思っけどな。

って前回ってなんだ？ 前回って？

いや、まあいいさね。

とにかく普通とは言い難いということだ、そして俺が言いたかったことは。

今日も今日とてじゃなく、今日『は』学校へ行けるってことだ。

もう既に入学式から二月近く経過している、その間に俺は、13になり、偶然なことに学校に行けた日数も13だ、不吉だなオイ、まあいいけど。

行けなかった時は何があったのか？

前回で味をしめたのか、似たような手口で嵌められ、どごその奮戦地帯で目を覚ましたり、後は・・・いや、止めよう、余計イラつくし。

つか俺も嵌まるなよ・・・でもジジイのメシ美味えしな・・・クソ、つい食っちゃまう、なんか一度食ったら病み付きになる呪いでも掛かってんのか？

バカらしい・・・とは言えん、ジジイならやりかねえん気がする。

っと・・・何の話だ？

ああそうそう、学校に行くのが極端に少ないって話か？

まっ少ない原因の半分は・・・いや三分の二だな、はジジイだけど、残りの三分の一は、ある意味自業自得。

平たくいうと停学をくらいまくってるからだ。

元々の目つきの悪さもあって上級生連中やらに、やたらと目をつけられる。

穩便に済まそうと思わなくもないが、大概は穩便には済まず、ついつい、手が出ちまうわけだ。

まあなんだかんだで喧嘩は好きなんだけどな。

まっそんなことを繰り返してるせいか、先生連中やらには問題児として扱われてる。

でクラスのヤツらからも。

「うわっ・・・今日、鬼島来てるし」

「マジ!? チツ・・・アイツが来ると教室の空気悪くなるんだよな」

「バツ、聞こえるだろうが」

教室に入った途端に聞こえる声、まあこんな感じだ。

最初は一応、アイサツくれえはしてたけど、今はアイサツしても反ってこねえし、メシや班作業をするような時も完全に俺一人だけ余りモノ。

先生連中も形だけ一回は、一緒に組めとかとか言うが、ホントに形だけ、すぐに放置される。

なんだろ・・・自分で言ってるんだが、凄まじく灰色だなオイ。

いや、まあいいんだけどよ。

とは言え学校が嫌いなのか、と言われりゃ、そこまで嫌いでもね

え。

そりゃ完全に一人ぼっち街道まっしぐらだが、遠巻きに見てるぶんには楽しそうだしな、見てるだけでも楽しいもんだ。

ますます寂しいなオイ。

「あつあの……き、鬼島君、えと……プ、プリント」

っと考え事に耽つてると、隣の席の女子生徒、名前は……知らん。

が、ビビりながらプリントを渡してきた、はて？

「何よコレ？」

チラッと横目で見ながら聞く、すると女子生徒はビクンと体を震わせて今にも泣きそうな顔になりながら。

「えっ、えと、やつ、休んでる間に、えと……」

はあ……俺がいない間に配られたプリントってことね？

で、隣の席だから預かってたってところか。

「ありがとな」

礼を言いながらプリントを受け取りカバンの中に入れておく。

受け取る時かなりビクンとしてたが……つか、そこまでビクンすることはねえーだろに。

そんな考えが顔に出たらしくプリントを預かってくれてた女子はますます、泣きそうな顔になる。

つとイカンな。

「別に怒ってねえーからな？ プリント、ありがとな」

それだけ伝えて教室から出て行く。

流石に泣かれるのはカンベン願いてえしな。

さって次の……つっても最初の授業だけど、は、サボるとすつか。

そう決めると自販機からコーヒーを買って屋上へ。

何故、屋上か？ サボリと言えば屋上だろ。

『ガチャ……キーン』

屋上へと続く扉をあけて屋上へ。

今日も中々、いい天気。

「絶好の昼寝日和ってか？ 昼じゃねえけど」

一人ごちり、貯水タンクがある場所へと上る、ココだと見つかりにくいのだ。

まあ別に見つかったところでスルーされるけど。

ゴロリと横になり目をつぶる。

『キンコンカーンコーン』

授業開始を告げる鐘の音を聞きながら、訪れる眠気に身を任せた。

・  
・  
・  
・

「ン・・・あゝ~~~~っ」と

下から聞こえてくる声、どうやら休み時間に入ったらしい。

ゴキゴキとクビを鳴らしながら買って来てたコーヒーを飲む。

「オイ、たったの五千円ってどういうことだ、アア？」

「だって、もう・・・お金が・・・」

「オイオイ、オマエん家、コンビニやってんだろ？ レジから持つてくればいいだろ？」

「そつそんな、無理です」

「無理じゃねえだろ無理じゃー!!」

ハア~~~~、なんだありや？

あんまりにも不快な声が聞こえてきて下を見てみりゃ案の定、気の弱そうなのにかかっているアホ共。

気にいらねえなあオイ。

『グイッ!』

一気にコーヒーを飲み干し、空き缶をたかりくれてるアホ共の一人に投げ付ける。

『カンッ!』

「つてえ!! なんだあ!？」

ナイスヒットつか。

「よつと」

寝ていた場所から飛び降り。



「金が欲しいなら新聞配達なり何なりとして働けや、もしくは武装ゲリラなり盗賊なり潰して手に入れるや」

前半は万人に進めるが後半は素人には進めないけどな、死ぬ確率が高いし。

「ハア！？ コイツいきなり出てきて何言ってるんだ？」

「ン？ アイツ、一年の鬼島だぜ？」

「鬼島あ、あああのクソ生意気な一年か」

クソ生意気ねえ？

まっ生意気なのは否定はしねえけど。

「オマエらみてえのにクソ呼ばわりされんなあカンベン願いてえもんだ」

「ンだと、コラ一年、テメエ、俺らは三年だぞ口の聞き方に気をつけろ」

ギロツと俺を睨むアホ。

「スンマセン」

「はっ、なんだ素直じゃねえか？ 所詮は一年坊主だ」

「なぐんて言うわけねえだろポケッ!!」

『ゴッ!!』

俺を睨んでたアホの顔に右拳。

「なっテメッ!!」

突っ掛かて来たヤツには前蹴り、からの。

「おらよ!!」

『ガゴッ!!』

踵落とし。

まあ前蹴りだけでも十分だったけど、最後の一人は裏投げで仕留めた。

「さつてと・・・寝なおすか」

ほうけてる気の弱そうな・・・多分、先輩をほって置き、再び貯水タンクのとこへと上る俺。

まっ一応は。

「そろそろ授業始まつから戻ったほづがいいぜ」

とは声をかけといたけどな。

ン？ 寝かしたヤツら？ 加減はしたから、その内、起きるだろ。

・  
・  
・  
・

で、次に起きた時に待ってたのは・・・。

「「「鬼島アアアアアア！」「」」

「おら、下りてこいやアアアア！！」

「テメエ調子ノリ過ぎだぞコラア！」

なんとも煩くほえ立てるアホの群れ。

どう見てもヤキ入れですね、ホントにありがとうございます。

って、ありがたくなえーよ。

つか先生どもはノータッチなのか？

ノータッチだろうな・・・下手に手を出したら普通に報復とかしやがるしな、この手のタイプは。

いや、まあ俺もことと次第よっちゃするけどよ。

つと……まっいつまでも喚き立てられんなあ煩くてしかたねえーし。

「はいよ、大勢でのお越しご苦労さん、で用件は……って見たまんまか？」

木刀、鉄パイプ、角材、釘付きバット、より取り見取りだなオイ。

わざわざ用意するのは大変だったろうに、特に釘バットは……コツコツ釘を打ち込んだんだるか？

なんにしてもホントご苦労さんだわな。

「鬼島ア、詫び入れろや、いくらオマエでも」

『メリッ！！』

言い切る前に靴底をめり込ませる。

わざわざ聞いてやる義理はねえし、言うことは大体わかってたしな。

「あつ、山路テメツ、普通最後まで言わせ

」

「ないんだなあコレが」

『メリッ！！』

靴底二回目。

「柿元！！ チツ・・・もういい、やれーーーー！！！」

「「「「オオオオオ！！」「」「」

最初からそうせいっつうの。

『ゴキゴキン！！』

クビを回しながら指を鳴らす。

さあーで、楽しい楽しい喧嘩の時間だ。

張り切っていこうかあ。

『タタン』

「ウオオラアアア！！！」

釘バットを持ってたヤツに。

『ガゴツ！！』

飛び膝！！

「しゃオラア！！！」

『ゴッ！！！！』

続けざまに角材持ちに右拳。

「死ね鬼島アアア!!」

『ブオン』

『ゴツ!!』

頭に衝撃、後ろを見たら鉄パイプ。

「テメエ、ンなもん頭にフルスイングしたら死ぬぞ普通!!」

流石にムカついた、銃弾撃ちこまれても死にはしないが、鉄パイプのフルスイングはチクツと痛え。

チクツとの時点で大分おかしいが。

いや、銃弾もだけど。

『ガツ!!』

鉄パイプをフルスイングしたヤツの胸倉を掴み。

『グシヤ』

「ガツ!?!」

頭突き、鼻が潰れたか?

が、手は緩めず。

「オラオラオラッ!!」

『ガッガッガッ!!』

頭突き、頭突き、頭突き。

完全に顔面がグシヤなつた時点で開放。

返り血で俺の額も赤くなってるだろうなこりゃ。

「ヒッ!?!」

そんな俺ン姿が強烈だったのか知らんが俺を囲んでた一人が小さく悲鳴を漏らす。

ビビるくれえなら最初から仕掛けてくんなっつうんだよ。

「まだやるかよ?」

この辺でしまいにした方がいいぞ、と提案。

「ざげんなっ!!」

「オラアアアア!!」

残念、まだやりたいらしい。

メリケン付きの拳で殴り掛かって来たヤツの拳を避けながらその

腕を掴み背負い投げ気味に投げ。

木刀を振り下ろしてきたヤツに対しては木刀を捌きながら後ろ回し蹴り。

手近のヤツの顔面を掴み振り回す、それに何人かが巻き込まれ地面に転がる。

「次に転がりてエヤツは誰だア!？」

振り回してたヤツをポイ捨てしながらニタリと笑う。

「やつやべえ・・・アイツ、絶対おかしい」

「バケモンだ」

「だから鬼島に手を出すのは止そうって言ったんだよ!!」

「うるせー!! こんなバケモンだとは思わなかったんだよっ!!」

仲間割れしだしたな。

流石にこの辺で終わりか？

「一年にナメられたままで終われるかよッ!!」

粘るな・・・ン？



『チャッ』

折りたたみ式のナイフ。

そんなモンまで用意してたンかよ。

「死ねー！ー！ー！」

ナイフを構えぶつかるように迫ってくるナイフ持ち。

『ヒュッ！ー！ー！』

ナイフを持つ手に蹴りを入れて上へと弾き飛ばし。

『ガッ、ドウッ！ー！ー！』

ナイフ持ちを地面へと押し倒す、そして落ちて来たナイフをキヤッチして。

『ガッ！ー！ー！』

と、ナイフ持ちの顔の横に突き立て。

「次はザツクリ、イツちまうぞ？」

「あ……あっ……」

ビビり過ぎてロクに言葉が出ないらしい。

つか俺を刺そうとしてたくせにコレくらいでビビんじゃねえっの。

そう思いながらもヒジを打ち込んで寝かしつけた。

むろん前歯の数本はいただいた。

人を刺そうとすっからだ。

チロツと今だに元気なヤツらを見ると一斉に。

「うっ・・・うわぁー！！！」

「ヒーーーー！！！」

「逃げるー！！！」

と、逃げて行く。

まっ、それなりに楽しかったわな。

っど・・・そういや今日、俺、昼メシ食ってなかったな。

喧嘩後に考えたことはそんなどうでもいいことだった。

ん？ その後、どうなったかって？

停学だよ。

何回目かは忘れたけどな。

・  
・  
・  
・

帰宅して、即効でジジイと喧嘩になった。

停学が理由じゃない、俺が録画してた時代劇に通販番組を上書きしてやがったからだ。

ドラマとかならまだ許して・・・いや許さんが、何故に通販番組だ？

ありえん、二重の意味で。

そんな怒りを込めた拳はジジイに届かず。

『ゴキッ！！』

カウンターで5番、6番。

『グシヤ！！』

ヒジで鼻骨。

『ゴシヤ！！』

踏抜きで左足の甲を持っていかれ。

最後は地面に仰向けに転がされてからの顔面への踵だった。

クソジジイ……いつか絶対……。

『パタリ』

### 三ページ目（後書き）

後書き

はい、マサの中学風景はこんな感じでした。

授業受けてないです。

ダメな子です。

つと、そろそろ次回か、その次あたりにアヤツが出てくると思います。  
れます。

あつ感想などありましたら是非！！

## 四ページ目(前書き)

前書き

よつやく更新・・・。

ただそれだけ・・・。

## 四ページ目

「が……ガキイイ……な、なんの恨みがあつて……」

鼻が潰れ、歯がねこそぎ無くなつて、オッサンがまるでバケモノを見るような目で俺に言う。

周りにはそのオッサンの他に腕やら足が反対に曲がつてるヤツら。

壁にはヒビが入り、所々にはベツトリと赤い血がツイている。

まあこの惨状を作つたのは俺なんだが。

「恨みねえ……別に恨みつて程のモンがあるワケじゃねえよ」

「じゃ……じゃあ……何故……」

虚ろな目で聞くオッサンに俺は拳を振り上げ。

「ただの八つ当たりだ!!」

『ゴガッ!!!』

振り下ろしたのだった……。

・  
・  
・  
・

中学に入学して、約十ヶ月程が経過し既に二月。

特に何事もなく・・・なんてこたああるはずもなくクソジジイのイタズラと言う名の罰ゲームは日々エスカレートしていき、それに比例して俺の出席日数はガリゴリと減る。

そして学校に来れた日でも、喧嘩を売られ買っては停学。

かれこれ・・・何回目だったか・・・十くらいまでは数えてたんだけどな。

とはいえたまには平和つつつか、比較的に楽って言やいいのか・・・  
・まっとにかく、そんな感じの日もあったりするわけだ。

学校は相変わらず・・・つつか前にもまして、厄介者を見る目の数が多いんだけど。

それでもやっぱり学校は嫌いじゃねえ前にも言ったけどな。

「マサナリさ～～ん!!」

俺を呼ぶ声。

「あん・・・なんだ、ポン太かよ?」



「なんだってヒドイツスよマサナリさ〜ん!!」

微妙に半泣きなコイツ、本田 雄太、あだ名はポン太。

まっ俺が命名したんだけど。

このポン太、何故か俺の舎弟になりたいと言い出し、却下したにも関わらずに、舎弟を名乗るというよくわからんヤツだ。

つか同い年だったつうに・・・敬語っぽいのも止めろっつっても一向に止める気配はねえーし。

「あっそうそう聞いたツスよ、この前、高校生20人をぶっ飛ばしたらしいじゃないツスか流石ツスよ!!」

「おかげで停学くらったけどな」

そして正確には20人じゃなくて26人だ。

つか高校生が中坊相手に、しかも一年に20人以上用意するって正直どうよ？

いやまあそれ以上どころかその10倍の数しかも銃持ちに囲まれたコトがあっけど。

よく切り抜けたモンだ・・・普通のヤツなら死んでるっつうの。

ああホント、人外バンザイだわ。

「マサナリさん、何急にバンザイしてるんすか？」

どうやらホントにバンザイしてたらしくポン太にツッコまれた。

「気にすんな、生きてるってなあ素晴らしいと思ったただけだ」

「はっ・・・はぁ・・・マサナリさん、たまくに変ツスよね？」

「ほっとけ」

つか俺みてえのに付き纏ってるポン太のが変だろうに。

まっ、ポン太のおかげで、学校が少し楽しくなったと思わなくもねえーけど。

コイツは舎弟つつってるけど俺ンとつちゃこの学校でできた初めてのダチ・・・と言えなくもねえーしな。

「あっ、そだマサナリさん、昼メシ食いました？ まだだったら、さっきパン買って来たんで一緒に食いましょうよ」

あっ、そついや今日は給食じゃねえ日だったか・・・。

ちなみに、月、水、金が給食、火、木が弁当。

用意出来なかったり忘れた人は、購買でパンや、おにぎりを買っている。

まつ俺は普段はちゃんと弁当用意してんだけどな。

むろん自作だが。

つといけね、ポン太、ほったらかしだし。

「じゃ屋上で食うか？」

「ウスツッ!」

とポン太と一緒に屋上で昼メシを食うことに。

あつ、パンの代金は屋上に向かう途中にポン太キツチリ払ったからな。

『ガチャ・・・キー』

「ちっと雲ってんな」

「ツスねえ、そっぴや今日は夕方から雨が降るみたいツスよ」

雨か・・・夕方からだったら帰るまではギリギリもつか？

まっ、もし降ってきててもコンビニで買やいっか。

そんなことを考えながらテケトーに場所を確保してパンを食う。

個人的にはパンよか、おにぎり、のが良かったと思わなくもねえーが、流石に口にはしない。

「ボ、ボ、ボ、ボクは、お、おにぎりが好きなんだな」

「スンマセン、二択をあやまりましたー！！」

どうやら我慢出来ずに貼り絵の技術が凄い放浪癖な裸の画伯のマネをしてしまったようだ。

ペコペコと謝るポン太。

まっ確かに、おにぎりが良かったことはガチだけど、実はそこまです気にしてなかったりする。

ただ、たまにするこういうやり取りが楽しかったりする。

やっぱりダチってなあいいもんだわ。

そう思いながらパンを口に運び。

「うん、美味えな、ポン太、食わねえーならオマエのも食っちゃまうぜ」

「食うツスよ!!」

慌ててパンを食べ始めるポン太。

当然のように。

「ウグツ・・・ン~~~~ン~~~~」

と喉に詰まらせてたりする。

そんなポン太にコーヒー牛乳を渡し飲ませた上で。

「ボ、ボ、ボ、ボクは、お、お・・・オクレ兄さーん!!」

画伯とみせかけマッスルに憧れる華奢なナイスガイ。

「ブフウー!!」

綺麗な虹が出来た。

ククツ・・・ああ楽しい。

「うう・・・ヒドイツスよ・・・」

「悪い悪いっいな？」

ポン太と居て気付いたことだが、どうにも俺は人をからかったりすんのが好きらしい。

この辺りジジイの影響かと思わなくもねえーが、そう考えるとア  
イタタタとなっちまうんでスルー。

「ん・・・おい、ポン太、その腕どうした？」

そんなことを考えてた俺だが、ポン太の腕に巻かれてた包帯に気  
付き、その事をポン太に問う。

「あつ・・・えつと・・・」

ただ転んだとかだったら、それで良かったんだが、ポン太の様子  
からして、そうじゃなさそうだ。

コイツ、妙にポケ共に好かれやすいからな・・・たまに、こつこ  
う風にケガをこさえてくんだよな・・・。

詳しく聞いてみたら案の定、電車で二駅ほど離れた場所に買い物  
に出掛けたら、その地元のヤツらに絡まれたらしい。

「確かにアイツら一人が加屋中の梶原って言ってたッス・・・」

加屋中・・・梶原ねえ。

俺ん、ダチに手を出したア、ナメくさりやがって・・・。

「悪い今日、俺あ午後はフケるわ先生連中にそう言っといてくれや」

「えっ・・・あっマサナリさん!？」

ポン太にそう言い残し。

『ヒョイ』

屋上の柵から下へと飛び降りた。

『ダンッ!』

着地は成功、多少、足は痺れたが、直ぐに動くから問題はない。

目指す先は、むろん電車で二駅にある中学。

そう加屋中だ。

梶原つてのが、どんなヤツかあ知らねえーが、必ず見つけ出してやる。

グツと足に力を込めて走り出したのだった。

・  
・  
・  
・

「ここが加屋中か・・・」

なんつつか・・・。

「ココぁホントに学校かよ？」

思わずそう言うくらいに、ボロというか、なんつつか、壁中はラクガキだらけだし・・・。

マンガの世界並に荒れた感じの学校。

まっある意味、俺もマンガ並にぶっ飛んどるといわざるえねえー生活を送ってるんだが。

っと、んなこたぁどうでもいいわな。

校門にあった学校の名前を確認した後は裏手へと回り、壁をヒョイっと乗り越える。

乗り越えた先には。

「アア、誰だテメエ？」

テンプレよろしく、タバコを吸ってる加屋中の生徒。

タバコは二十歳になってからだつっくに。別にコイツらの寿命が縮もうが関係ねえーけど。

まっ、都合が良いし。



「梶原つてのいるか？」

「ハア！？ 梶原さんに何のようだア？」

「まさか喧嘩売りにきたとか？」

「ギャハハ、そりゃないだろ加屋中<sup>うち</sup>喧嘩売るとかどんな自殺志願者だよ」

ふむ・・・聞き方が悪かったか・・・。

『ゴガツ！！ゴツ！！』

一番近くにいたヒゲ面の顔面に蹴り、更に続けて金髪のヤツを横殴りにする。

「梶原つてえのに伝えて来れや、鬼島の政成さんがアイサツに来たつてよお」

俺が名前を言った途端、残つてた連中は顔色を変え。

「き、鬼島！？」

「マジか！！ 藤中のイカレた一年！！」

どうやら俺ン名前も結構、売れてるらしい。

イカレたつてのがちいとばかり引つ掛かるけど。

まっいいさね。

「ほら、とつとと呼んでこいや、それとも残った二人から一人に減りてえーか、アア？」

ギロリと睨みながら、おど．．．もとい説得。

その説得が効いたのか素直に走っていった。

そして．．．。

「また大人数だなオイ．．．」

呼んだのは梶原つつうヤツだけだったはずだがやって来た人数は軽く30人はいる。

ご丁寧にバット、木刀、etc所持で。

その先頭に立ってるオールバックのヤツ、多分アイツが梶原つつうヤツだろう。

「オイ、コラ鬼島ア、テメエ俺になんの用だ？」

そんだけ人数引き連れて来て用事も何もねえーだろうに。

『ゴキゴキン!!』

そう思いつつクビを回しながら指を鳴らす。

「楽しい楽しい病院生活を届けに参りましたってなッ!!」

『タタンッ!!』

そう言いながら、二歩程走り、跳び膝を撃つ。

それが合図となり大乱闘が始まった。

・  
・  
・  
・

後から加勢に来たヤツらも含めて結局50人近くを沈めた後、梶原ってヤツの髪を掴み。

「オマエが梶原でいいよな？」

「グッ・・・ガッ・・・クソが・・・」

ふむ・・・。

「聞こえなかったのか？ テメエが梶原か!？」

髪を掴んで手に少しだけ力を入れる、ブチブチと何本かの気が

抜けた。

「あっ……ああ」

それで漸く聞こえたらしく、そう返事が返って来た。

それを確認すると。

「テメエ、俺ン、ダチに手を出したらしいなあ？」

「あっ……誰だよ……」

シラばっくれる気がよ……。

「二日前だ、二日前に藤中のヤツに絡んだろ!!」

「あっ……そりゃアイツらから喧嘩売って来たんだ……」

な……何!?

「嘘ついてんじゃねえーぞ!!」

「嘘じゃねえ……」

どづいづこった……こりゃ……。

ポン太は確かに絡まれたつってたのに……。

でも、こんだけボコにされてんのに、わざわざ嘘を付くなんて「  
たあ……。」

チツ……わかんねえ……。

その後は、どうにもスッキリしない気持ちながら地元へと帰る、  
もう放課後だったがり一応は学校に寄ってくかと学校へと足を向け  
る。

むろん校門からじゃなくて、裏手の壁から入った。

「……先輩やったツスよ」

聞き慣れたポン太の声まだ残ってたか、どうにも、まだ気持ちが  
スッキリしねえーしポン太と遊んで帰え……。

「ってこたあ上手く鬼島をノセられたんだな？」

アン！？ ノセた？

「ええ、アイツ、マジ単純ツスよ、ちょーと仲良くなったフリすり  
や簡単に動いてくれますよ」

「義理と人情ってヤツか？」

「ブツハハハ、バカだねえ……今時流行らねえーって」

なんだ……それ……ンだよそりゃ……。

どついつことだよ……。

「いやあ柿本先輩、何言ってるんすか、そういうバカだから動かさや  
すいんじゃねえーツスカ」

「ギヤハハ、オマエ、それでも鬼島の友達かあ？」

「そうツスよ……、あんな便利でバカな友達は他にいないツスカ  
らね……あつ、俺、舎弟だったっけ？」

「どっちでもいいだろ、どっちでも……」

ハハ……ンだよ……そっか……そういうことかよ……。

ハツ……ダチが出来たと思ってたら、ダチでもなんでもなかつ  
たってか……。

……。つたく……楽しかったんだけどなあ……アレも嘘だったんか  
……。

『ザッ』

今だ聞こえるバカ共とダチだったヤツの笑い声……。

楽しそうでやんの……。

その笑い声がつめき声に変わるのに時間は掛からなかった。

『ポタ・・・ポタ・・・』

最悪な気持ちで歩く俺、天気も空気を読んだのか、見事に雨が降ってきた。

まっ今夕方から雨ってダレかが言っしてしな。

コンビニで傘、買おうかと思ったが、そんな気分じゃねえ、どちらかつつと濡れて帰りたい気分だしな。

『ポタポタポタ・・・ザアアアア』

雨足が一気に強まる。

そんな雨の中、傘もささないで歩く俺を訝しい気に見る連中。

気にせずに歩く。

「し・・・ごめんなさい・・・」

「ああ、ゴメンで済むわけねえーだろ、この服幾らしたと思っただ？」

歩く中、聞き覚えのある女の声と耳障りな声。

「あっ・・・あっ、ごめんなさい、ごめんなさい」

「ゴメンじゃ済まねえーって言ってんだろ？　ン？　オマエよく見

たら結構カワイいな・・・よし、来い!!」

「やつ・・・やだ・・・ごめんなさい、ごめんなさい!!」

見てみりゃ、俺と同じクラスで結構頻繁にプリントを預かってくれる女子。

で、その手を引っ張って拉致ろうとしてやがるチンピラ。

ただでさえイラついてるつつうのに・・・。

あつ、そうだ、どうせこの際だ・・・。

ある事を思い付き二人に近付く、そして。

『ガシッ』

とチンピラの腕を掴む。

「アア？ 邪魔すんなガキ」

凄んでやがるチンピラ、構わずにギリギリと力を込める。

「アガッ・・・」

その痛みでクラス的女子を掴んでた手が離れた。

「ほら、行きな」

「あつ、えっ？ き、鬼島・・・君？」



「いいから行けや」

クラスの女子を追い払うようにシッシツと手をやるとクラスの女子は。

「あつありがとう」

と頭を下げて、濡れるのも構わずに走っていった。

まつ別に礼を言われる為にしたワケじゃねえーし、ぶっちゃけオマケみたいなモンなんだが・・・。

俺がホントに用があつたのは・・・。

「ガキイ・・・。テメエ、正義の味方気取りか？ 世の中そんなに甘くねーっぞ?」

そう言いながらチンピラは停めてあつたクルマの中へと俺を押し込んだ。

ハハ・・・よしよし予想通り。

で、連れてかれた場所もまた予想通りに、ヤク 事務所。

そこで俺はイライラ解消の為に暴れ回った。

大分スッキリしたトコで冒頭へと戻るってわけだ。

『ファン、ファン、ファン!!』

ってヤベツ、暢気に回想に浸ってる場合じゃなかったわ。

青い服の人らが来てんじゃん。

流石にちいと暴れ過ぎたか……。

さて……捕まる前に逃げるとすっかな。

『ダンッ!!』

そう決めたと同時に割れて全開になった窓から飛び降り……。

『キキーーーーッ、ドンッ!!』

クルマに引かれた……。

下を確認すんのを忘れてたわ……我ながら若干ズレた感想だな  
オイ。

『ガチャ!!』

「ヤッバイ……引いちゃった、でもコレ私、悪くないよね、うん  
全っ然悪くない、だって人が降ってくるとか思わないもん、だから  
私は悪くない、だから引いちゃった人も迷わず成仏してね（ハート）」

┌

俺を引いたクルマから出て来たヤツは女だった、しかも、そのクルマは上にパトランプが付いている、つまりコイツは刑事ってことだが・・・まあそれはいいとして。

ムクリと起き上がり。

「生きてるっつうの」

結構痛かったけどな。

「あつ生きてた・・・ヤバイ、このままじゃ私が人を引いたことがバレてしまう、よしキミ、もう一回横になれ、丁寧に引くから!!」

「なるかボケ!!　つか丁寧に引くってなんだ!?　つかオマエ刑事だろ!!」

「刑事だからこそバレるわけにはいかないのよっ!!　さっ早く横になりなさい、大丈夫痛くしないから」

「痛いに決まってるだろうがアアア!!」

結局、この後、このぶっ飛んだ頭を持った女刑事に拉致同然な感じで連行されたのだった。

そして・・・あのヤク事務所を潰したのがバレ取調べを受けることになったのだが。

「えっ？ 何、アンタ中坊！？ 若さが憎い、つか中坊のクセにヤクの事務所を単身で潰すとか・・・アンタ頭大丈夫？」

「知るかつ！！ つかオマエに言われたくねえーよ！！」

「オマエじゃない葉子さんといいなさい、もしくは葉子様！！」

「葉子・・・ハッ！？ オマエなんざパー子だパー子、頭がパーのパー子だわっ！！」

葉はよっは 葉とも読むし・・・。

「誰がパー子だクソガキ、射殺するよ！！」

「ハッ、やってみ・・・」

『ダキユン！！』

「危ねっ！？ って、おいホントに撃つか？ 避けなきゃ当たってんぞ！！ つか俺じゃなかったら確実に死んでんぞ！！」

「チッ・・・当たればよかったのに」

マジで有り得ねえ・・・こんな有り得ないヤツはクソジジイ以外には初めて見た・・・。

「あっそっついや私アンタの名前聞いてないわ、あっ私のフルネームは香田 葉子だからパー子って言うなよ」

今更かよ・・・ハア・・・。

「鬼島 政成だパー子」

「だからパー子って言うなアア、よし、そっちが、その気なら、えっと・・・バカナリ！！ そうアンタはバカナリよっ！！ フフン、とっさに上手い事、考えつく葉子ちゃん天才」

別に上手くねえーし。

つか・・・。

「ちゃん、付けはねえーわ・・・歳を考えろよ」

「歳の事を言うなアア、どうせ私は三十路前で結婚は疎か彼氏だつていないわよー！！！」

『ダキユン、ダキユン、ダキユン！！』

かなり撃たれた、けど避けた。

とこんな感じでパー子との付き合いは始まったのだった。

## 四ページ目（後書き）

後書き

パー子の登場でした。

ここから少しはネタも多くなってきました。

後、微妙にフラグ臭も……。

ンッン、さて次回は……また少し長くなるやもですが頑張っていきますので、お暇ならば。

感想などありましたら是非！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5334r/>

---

鬼島 政成の中学生日記

2011年4月20日09時53分発行